



沼田城は本多正永のあと正武、正矩と続き、享保15（1730）年駿河田中に転封となり、同17年替わって黒田直邦が常陸下館より移ってきました。右の図は酒井家資料に含まれるもので、袋書に享保16年とあり、これが正しいとすると本多⇒黒田の時期、すなわち代官支配時のものと考えられます。

一旦破却された城を再興したのは本多家ですが、本丸と二の丸は荒れたままで、御殿は三の丸に築きました。この図で「居所」と記された部分にありました。正保図では本丸と二の丸の間に堀と石垣が描かれ、そこには四層の天守がありました。真田氏の改易にあたり、沼田城を象徴する天守付近が集中的に破壊されたようで、その後城主となった大名にとっても、その場所を再興するには遠慮があったのでしょうか。それでもこの絵図には本丸東の櫓門があった虎口とそれを形成する濠と土居が描かれている点が気になります。破壊されたと言っても、もしかするとこの部分だけ故意に残されていたのではないでしょうか。もしそうだとすれば、城にとって虎口や門の持つ意味を考えさせる事例になるかもしれません。

沼田城跡を訪れてみると、埋められた堀が発掘され、出土した石垣が見学できるようになっていました（写真1）。これがもともとの石垣だとすると、意外に低い石垣だったとの印象を受けます。積み石の大きさはまちまちで、角の取れた丸みのある石を使って積まれていたことがわかります。利根川の河原石なのでしょう。現存する櫓台石垣も、城内側はそのような石で積まれていますが（写真2）、対照的に城外側は表面が調整された横長の石を積んでいます（写真3）。



写真1



写真2



写真3



沼田城跡の公園内に残る門礎

名門真田家、夢のあと

上田城に籠る真田昌幸・幸村父子の抵抗によって、徳川秀忠率いる主力軍は関ヶ原合戦に間に合いませんでした。このとき、幸村の兄信幸は徳川方につき、論功行賞の結果、上州沼田領を加増されました。その後、元和2（1616）年信幸は父祖伝来の上田城に移り、沼田城には息子信吉を置き、以後、その息子信利まで真田家が沼田を治めることとなります。

沼田領の表高は3万石でしたが、信吉の子信利は「拡大検地」を行い、14万石余の打出しを強行しました。その結果、民衆にとっては大幅な増税となり（『藩史大事典』2巻）、人々は疲弊することになってしまいました。こうした強引な政策が災いしたのか、天和元（1681）年、江戸両国橋構架用材未納の責を問われて改易となりました。これにともなって、沼田領の検地を実施したのが前橋の酒井家でした。

沼田城には真田家に替わって入ってくる大名はおらず、幕府によって城は破却されました。元禄16（1703）年に本多正永が入封するまで幕府の管理下に置かれることになりました。



"Shiro Fumi" No.44 The News of Himeji Center for Research into Castles and Fortifications.